「景観としての地形」　山口県景観アドバイザー 村重 保則

岩国に起業し 30 年が経つが、この街全体の景観は昔も現在も変わっていない。市街地を流れる錦川は、なだらかな下流で勢いを失い、地形によって二つに切り裂かれ、三角州を形成しながら、瀬戸内に注いでいる。

私は現在、歴史上のどの地点からの景観が良質で、良質でないのか、というような二元論と、それらの保存や継承、といった言葉によって景観を案ずるのではなく、われわれの想像をはるかに超えた、景観をかたちづくる骨子としての「地形」を精密にとらえていくことが、景観を語るためのキーワードになると思っている。

たとえばここ岩国では、三角州に代表されるような地形のズレが、吉川公をして優雅な錦帯橋を構築させ、背後の山々に城を築かせたのではないか。土地々々の特徴や景観を生み出してきたのは、計画である以前に、地形なのではないか。

設計という行為を通じて、土地のもつ歴史や状況を十分に踏まえた全体(景観)を考えて行きたい。